

## 美わしき人間関係 (60・1・19)

——法然と親鸞——

龍村 基雄 (昭11文甲)

唯今ご紹介の龍村でございます。

今日の聞き手はまあ十人ぐらいで、気楽に話ができると思っておりました。処が時間ギリギリにやってきましたと聞きますと、数十人もきてらっしゃるとのことと驚いています。

私、二十年以上もロータリークラブというのへ入らされていまして、そこでよく話をさせられました。その中に、私の話し方を「龍村節」などと言われるようになりましたが、ロータリーの集まりでの話は、そうむずかしいことにはございません。処が本日の聴衆は、私が今まで話をさせられた中で一番レベルの高い聴衆なんです。話をする者にとっては、本日の聞き手の皆さんは、一番話のしにくい方々でございます。苦手の先輩も沢山おられます。

最初に私の人生の略歴を一寸申し上げます。大正三年七月に生まれまして、父が大正五年に四

十二歳で亡くなりました。私の生後一年八か月でしたので、私は父というものを全然記憶しておりません。幸い祖父が六十八歳で元気でしたが、鹿兒島別院の主管という役をしておったのを、長男が三人の子供を残して先立ったものですから、急拠その役を甥に譲って、京都の生家の寺へ戻って参りまして、兄九歳姉六歳私三歳の三人の孫を、父に代って養育してくれました。ですから、私の人生に取って、祖父ほど私が感謝し尊敬する人物はございません。この祖父は、私が三高へ入ります二年前に八十三歳で亡くなりました。

あとの話との関係で、ここでも少し祖父の話を見せて頂きます。祖父は一八四九年嘉永二年の生れで（後日注 折田彦市校長と同年。会報65号板倉君稿により知る）、明治元年は丁度数えの廿歳はたちでした。ですから、幕末の動乱の京都は肌で知っておったわけです。新撰組の近藤勇とも、三条大橋などで何回かスレ違ったということで、スポーツや人気タレントなんかいない当時では、京童わらべの女共到大変人気があったそうです。

こんな時代の祖父が、父に替って、物心つく前から私を養育してくれましたので、この祖父が私に与えた影響というものは大きいものでございます。そして、それは、一言でいえば、佛教的な素養だったんではないかと思っております。

この祖父は、人に話をする、お説教をするのが大変得意でございました。（ここでの脱線は省略）ところで、僧侶には大体五種あるかと思えます。宗教学や佛教学ないし宗学しゅうがく、あるいは哲学・

歴史に専らの学僧。本山の行政を司る政僧。一寺を守る寺僧。専ら布教伝道をする布教僧。雲水の様にまだ修業中の修業僧の五つに分類できると思っています。一番数の多いのは、皆様が街で見受けられる寺僧の人達であろうかと思えます。

私の祖父は、布教が主で、学僧寺僧を兼ねた生涯でしたが、全国各地へ布教の留守中の自坊の檀家参りの仕事は、小学校一年頃から私の仕事になりました。兄は大切にされて、京都の叔父の家から中学に通ったからでもありました。お経などは、聞きおぼえで、おのずから唱えられるようになりました。短い偈文や正信偈などがそれで、阿弥陀経や観経などは祖母や祖父から、訓み方を教えられました。

祖父のお説教は、春秋のお彼岸や、年一回の報恩講の機会に聴聞したのですが、祖父の最も得意とする「熊谷直実出家譚」は、遂に聞く機会がありませんでした。しかし、話しの始めの部分の、ユーモアを交えた聴衆導入のコツや、最後の締め括りの要領は、自然に私の身についたように思われます。祖父はお説教の最後を「本席の肝要はご文章を」と、語調をかえまして、蓮如上人のご文章の一つを声高く唱えるのが常でありました。そうしますと、お説教を聞いていた（聴聞という）人々は、口々に「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」とお念佛を唱えます。これを佛教界では、お説教の「お受け」と申します。

皆さんの中には、多勢の人の前に立って、講義や講演をなさる職業の方や、そういう機会の多い立場の方々が少なくないと思うのですが、この話というものの効果というものが何より大切でございましょう。そうなるためには、話し手も一所懸命でなければいけません。聞き手も一所懸命でなければいけません。そして、話の効果というものも、聞いて何程かの知識をふやすというのは、これは最低の段階です。最も大切なのは、話を聞いて、深く感動して、心温まる宗教的情操がおのずから湧いてくる、そういうようになるのが、一番理想的でございましょう。その意味で、今申しましたお説教の場合の「お受け」ということは、大変示唆に富んだ意味深い言葉でございませう。

これから、愈々本論に入りますに当りまして、本日の私の話の最後が、どうかそういう風にありたいと願いながら参りたいと思います。

今日のお話の本題は「美<sup>うま</sup>わしき人間関係」という題で、サブタイトルを「法然と親鸞」と致しました。

皆さんのお手許にお配りしてあるものは、私が六十年來大切に使用しておりますお経の本から抜粋してきたものでございます。親鸞聖人が、晩年に京都市内の、この会館に程近いところでお作りになった数多い「ご和讃」。その中の「高僧和讃」の中から、数首を選んでございます。

処で、今年は一九八五年ですが、丁度八百年前の一一八五年は、平家が壇の浦で敗亡して安徳天皇が海に沈まれた年です。それで、平家ゆかりの五つの町、すなわち、先ず京都。つぎに木曾義仲に追われて逃げていった福原、いまの神戸市。ついで屋島のある高松市。平家の神社の巖島神社のある宮島町。最後に壇の浦のある下ノ関の五つの都市が、連絡を取り合つて、源平八百年を記念して色々な行事をやろうと相談をしております。私も、京都府観光連盟や京都市観光協会の役員柄から、そういう行事に関係させられまして、今更ながらに、八百年前の日本や京都の有り様に思いを馳せておる次第です。今日の副題の二人の人物、法然と親鸞は、正にその時代の日本と京都とに生きた大思想家であり宗教家でありますから、この年の新年の三高会館で、このお二人のお話をする廻り合せめぐりあわせになつたのも、まことに不思議の佛縁といえるかと存じます。

ここで皆さんのご記憶に留めて頂きたい三つ四つの年がございます。先ず一一三三年、これは法然が生れた年、四十年後の一一七三年は親鸞の生れた年です。先程申しました平家滅亡は一一八五年ですから、このお二人は正に源平時代の生れで、平安時代の末期から鎌倉の初期という日本歴史の激動期に生きた歴史的な日本人、そして京都人ともいえるでしょう。そして、法然は浄土宗の開祖、弟子の親鸞は、更に師の教えを深く追及して浄土真宗という、共に今に盛んな日本佛教の二大宗派を開かれた方でございます。

当時の日本では、後世の明治・大正・昭和時代の東大や京大、一高や三高を全部ひっくるめたような学問の淵藪、メッカは比叡山延暦寺だったんです。その四世紀程前に、伝教大師最澄によって開かれた延暦寺には、全国の心ある秀才が集まってきて勉強を致しました。但しその学問とは、我々が明治以降の学校制度によって学んだ知識学問とは趣きを異にして、一言でいえば「人生とは何ぞや」という学問であり哲学であり、人間としての生き方死に方を悟ろうとする佛教への精進の道でありました。

以下、順序として、先ず法然の場合からお話しを致しましょう。お生れは第七十五代崇徳天皇の長承二年癸丑みづのとうしの年、先に申しました西紀一一三三年でございます。父は美作押領使漆間みまさかの時国で、幼名は勢至丸。九歳で父が夜襲を受けて討たれるという悲運に遭われました。勢至菩薩の名を取って勢至丸とわが子に名付けた程の父ですから、もとより佛心のある人だったに違いありません。押領使というのは地方官の一つで、土地の豪族が中央政府から任命されて、地方の内乱や暴徒の鎮定、盗賊の逮捕に当たったのが始まりで、平安時代には全国各地に設けられた後世の師団長兼警察本部長の様な高い地位です。美作は今の岡山県の山地で、法然の誕生寺というのが名所になっております。

この父の非業の死の臨終の時、家の子郎党が勢至丸に、早く成人して父の仇を討つように申し

ました。これに対して、勢至丸は、「いや、われ長じて父の仇を討ち、討たれた仇の子がまたわれを討たんとし、わが子またこれにならう。繰返して互いに相討ち憎み合いて限りなき道よりは、敵味方ともに救わる、佛の道を究めん」と言つて出家したとする説と、父のそういう主旨の臨終の遺言によつて出家したとする説とがある。ともあれ、九歳で出家した勢至丸は十五歳になると、比叡山に上つて修行し学問をする。そして恵心僧都源信の「往生要集」の説く念佛の道に進み、のち山を下りて、黒谷の叡空上人の弟子となつて、その名も二師の名を取つて、源空と自称されました。

親鸞は、第八十代高倉天皇の承安三年癸巳みずのとみの年、先述の一一七三年生れで、法然より四十歳年下です。父は藤原氏北家流の日野有範。皇太后職の貴族であつたのですが、七七代後白河天皇の子以仁王もちひとの令旨で平氏打討に立上つた源三位頼政が宇治で敗死した一八〇〇年の翌年、法然と同じ九歳で、父に次いで出家し、粟田口の青蓮院で、時の摂政関白九条兼実公の弟慈円の手で剃髮得度されました。やや長じて、やはり比叡山に上つて、堂僧として修行されましたが、心満たされず、山を下つて、吉水の禪房（今の知恩院のあたり）で専修念佛せんじゆの教えを説く法然房源空の門に入られたのです。時に一二〇二年、親鸞二十九歳、法然は六十九歳。当時は数え歳ですから、七十歳の師と三十歳の弟子という、遅い初めての出会いだったのです。これより先一一八五年に壇ノ浦で平氏が亡び、頼朝が一一九二年、後白河法皇が亡くなつた四か月あとに、征夷大將軍と

なつて鎌倉幕府を開きました。七年後の正治元年には早や亡くなって、二代將軍頼家の時です。母の北条政子が尼將軍といわれた不安定な時代背景の中で、文字通り鎌倉時代の初期の頃のことでございます。

この二年あとに二代將軍頼家も殺されて、弟の実朝が將軍という土御門天皇の承元元年。京都では法然らの専修念佛せんじゆが大きな社会的勢力となつて、既成教団や朝廷からも睨にらまれて「承元の法難」が起ります。その結果、住蓮坊・安樂坊などという若い弟子は斬られ、法然は四国に、親鸞は越後に流罪となります。この事件は、浄土教史はもとより、日本思想史上にも有名な事件であります。

この年、法然・親鸞らの永い間の庇護者であつた九条家の始祖の藤原兼実公も亡くなりますが、やがて流罪は「ご赦免」となります。

この間、藤井善信と改名して僧籍を剥奪された形の親鸞は、流罪先の越後で、土地の豪族三善為則の娘と家庭を持たれます。やがてこの女性は得度して恵信尼むねじよとされます。真宗史上貴重な恵信尼書を今に残された篤信の女性で、親鸞とは九歳年下。東西両本願寺の大谷家の源流の人でございます。

流罪赦免となりましたが、親鸞は、京都へは帰られず、家族と共に、信濃をへて関東地方へ向かわれます。これは、自分らを罰した既成教団の勢力も強く、世情不安定な古い京都よりも、当



時の日本の新天地であつた関東地方こそ、自分の信仰を深め、かつそれを人にも説く甲斐のある所とされたからでありましょう。また、師の法然がすでに亡くなられていたことも、京都へ帰られなかつた一因でございましょう。

このあと親鸞は、一二二四年の元仁元年、執権北条泰時の時、主著「教行信証」六巻を完成されましたので、浄土真宗ではこの年を開宗の年としております。

そして、親鸞の関東時代は二十余年もつづいて、多くの信徒ができ、今にその旧跡が数多く残つておるのでありますが、六十余歳を迎えられた聖人は、長男の善鸞を残して、晩年を京都で過すための帰りの旅に出られます。この旅の途中の東海地方や滋賀県湖東の木辺きべなどは、暫し足をとどめられて、教えを説かれたために、今だに東海門徒が多く、木辺派の本山錦織寺きんしよくが残されているのでございます。

なつかしい故郷の京都へ帰られた聖人は、定住の家を持たれず、所々に居を移しては、或いは著述に、或いは関東の信徒達との通信や交流の日を過されます。曾孫覚如が聖人滅後三十三年の永仁三年に書かれた「御伝鈔」下巻第五段に、「聖人故郷に帰りにて往事を思うに、年々歳々夢の如し幻のごとし。長安洛陽の棲すまも跡をとどむるに懶ものうしとて、扶風馮翊ふふうほうよくとところどころに移住したまひき。」とある通りでございします。

この親鸞の永い人生の最後の頃、八十余歳になられてから書かれたのが「高僧和讃」であります。これは、浄土教の七高僧、即ち印度の龍樹・天親の二菩薩。中国の曇鸞・道綽・善導の三大師と日本の源信・源空の七人を讃えられたものですが、この七人の中で唯一人、法然房源空上人だけが、親鸞と同時代の人であり、直接その聲咳せいがいに接せられた方であります。他の方は、その遺作の著述を通じて親炙しやされた先師達でございます。

この高僧和讃の中で、親鸞がその師源空上人を讃えられたものは二十首。一首が四行の文字であります。ここに、親鸞聖人の法然上人に対する敬仰のお気持が、実によく表現されているのでございます。

先ず「本師源空世ニイデテ 弘願くわんノ一乗ヒロメツツ 日本一州コトゴトク 浄土ノ機縁アラハレヌ」という冒頭の一首に始まりまして、「善導源信ススムトモ 本師源空ヒロメズバ 片州へんしゅう濁世ノトモガラハ イカデカ真宗ヲサトラマシ」と続きます。

さらに、「源空智行ノ至徳ニハ 聖道しやうだう諸宗ノ師主モ ミナモロトモニ帰セシメテ 一心金剛ノ戒師トス」とか「源空勢至ト示現シ アルヒハ弥陀ト顕現ス 上皇群臣尊敬そんけいシ 京夷庶民欽仰ス」と、その高德と教えが大勢至菩薩や弥陀如来そのものを髣髴とさせるものであったことを叙べて、最後の四首は次の如く結ばれております。

お手許に配りました資料をご覧下さい。すなわち「阿弥陀如来化けシテコソ 本師源空トシメシ

ケレ 化縁ステニツキヌレバ 淨土ニカヘリタマヒニキ」と、法然こそは阿弥陀如来の化身であつたと讃えられて、「本師源空ノオハリニハ 光明紫雲ノゴトクナリ 音楽哀婉雅亮ニテ 異香ミギリニ咲芳ス」と、臨終の際の周囲の有様を叙べられたあと、「道俗男女預參シ 卿上雲客群集ス 頭北面西右脇ニテ 如来涅槃ノ儀ヲマモル」とあります。

これは、お釈迦様が亡くなられた時の姿と同じ様に、北枕で、顔を西方極樂淨土の方に向け、右脇を下にした姿勢で、息を引取られた有様を述べたものであります。そして甘首最後の四行は、「本師源空命終時 建曆第二壬申歳 初春下旬第五日 淨土ニ還帰セシメケリ」と、締め括つておられます。

ところが、この様にお書きになつた親鸞聖人その人が、丁度半世紀後に、同じ姿でこの世を去られるのでありますが、これは本講の最後に触れたいと思つております。

今に残されている著述としては、この高僧和讃と有名な歎異抄の所々に、親鸞のその師法然に対する敬仰のお気持ちがよく現わされております。歎異抄では

「たとひ法然上人に賺されまゐらせて地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候」とまで言いつつておられるのでございます。

この様に、親鸞聖人の法然上人に対するお気持は明らかであります。一方、法然上人の親鸞

聖人に対するお気持。信頼の程はどうだったのでしょうか。それは、先にも触れました親鸞の曾孫覚如の「御伝鈔」の各所に、これを窺うことができます。

上巻の五段には、入門後そう年もへていない元久二年乙丑きのとうしの歳に、数多い弟子の中から特に善信房綽空（当時の親鸞の僧名）を選んで、自分の主著である「撰撰本願念佛集」を書き写すことを許しておられる。なお、その上に、その本に序文のような一句と筆者綽空の字を書き与え、また自分の姿を図画することも許しておられる。今で言えば簡単な写真撮影を許したという程のことでしょうが、当時としては、竝々ならぬ信頼の度を現わしているものといえましょう。

さらに、御伝鈔上巻第六段の記述には、つぎのようなところがございます。

それは、信行しんぎょう両座りょうざの下りくだといわれていますが、ある日親鸞が師の法然に提案をされて、弟子の方々に信不退しんぶたいと行不退ぎょうぶたいの席のいずれかを選ばしめられたことであります。これも、「大師聖人のたまはく、この条もつとも然るべし」とて、親鸞が書記役をして両座を分けらるる下りで、沙弥法力こと熊谷直実入道が遅参ながら信不退の座をえらぶなどの話であります。これも法然の親鸞に対する強い信頼を立証する件でございましょう。

かの承元の法難の時も、親鸞は師の法然よりも遙に遠い越後へ流罪という重罰です。

このことについても、親鸞の受け取り方は、有名な次ぎの一言によって窺うことができます。すなわち「大師聖人源空もし流罪に処せられたまわずば、我また配所に赴かんや。もしわれ配所

に赴かずんば、何によりてか辺鄙の群類を化せん。是れなほ師教の恩致なり」と。連累の処罰を恨むどころか、寧ろ悲運の廻り合せに感謝の念を表明しておられるのでございます。

時間の関係上これくらいにしておきますが、法然と親鸞という師弟二人の間に流れた敬仰の美わしきは、八百年の歳月をへだてました今日でも、我々の胸を打つものがあるのでございます。

かくて、一二六二年。龜山天皇の御代の弘長二年に、親鸞にも死が訪れて参りました。そのところは、御伝鈔下巻第六段に明らかでありますので、私が六十余年前から、祖父の老僧から直々教わりました節をつけまして、声高く誦したいと思ひますので、どうか静かにお受け下さいますようお願い申し上げます。(ここで輪袈裟を掛け僧形となりて声高く誦す)

「第六段。聖人、弘長二歳壬戌仲冬下旬の候より、いささか不例の氣まします。それより以来、口に世事をまじへず、たゞ佛恩のふかきことをのぶ。声に余言をあらわさず、もつぱら称名たゆることなし。しかうして、同じき第八日午時、頭北・面西・右脇に臥したまひて、終に念佛の息たえ終りぬ。時に頽齡九句に満ちたまふ」(ここで合掌して聴衆に向つて礼拝)

以上で、私の話を終らせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

この講話中、主題のお二人の先師についての呼称は、すべて法然しやうぜん聖人・親鸞しんらん聖人として、法然・親鸞という呼び捨てはしなかったのであるが、「神陵文庫」のための原稿では、必ずしも、呼称にこだわらなかつた。

なお、聖人か上人かについては、浄土宗・浄土真宗内はもとより、一般に各宗の開祖については、上人ではなく聖人の字を用いるのが常であることを付記しておく。

——質問会——

「もう一枚書いてあるのは何ですか？　ご説明ねがいます。」

この一枚起請文きしやうもんと書いてございますのは親鸞聖人の先生の、四十歳上の法然聖人の教え、これを一番平易に書いてある浄土宗の教典のうち最も大切なものでございます。それは十行ほどございしますが、初めの五行、これをちよつと見て下さい。ここに、当時日本一の秀才といわれた方でありましたのに、自分が頭がよいとか知識とかいいうことを全然誇らない自分をここに強調してある。そこに御留意いただきたいんです。そこんとちよつと指摘してみます。一枚起請文「もろこし我が朝あすに　もろもろの智者達のさたし申さるゝ　観念の念にも非ず。」つまり、哲学の文学博士なんかぐちゃぐちゃ理屈をいう、ああゆう観念の念にも非ず。「又学問をして念の心を悟りて。申す念佛にも非ず。ただ往生極樂のためには南無阿弥陀佛と申て疑なく　往生するぞと

思とりて申す外には別の仔さい候はず。」というておるところが、この一枚起請文の一番きわりでございます。

それから今一つ、歎異抄、その左に五行ほど書いてあるのも説明しませんでしたので、ついでに説明いたしておきます。その十五行ほど書いてある中ほどからあとに「親鸞におきては」というところで肩にカッコしてあるところがございますね。それから最後から四行目に「さらに後悔すべからず候。」というところでカッコしてございますね。この四行だけがこの中心でございます。つまり、今申しました一枚起請文の法然聖人の教へ、つまり頭がいいとか、知識とか、そんなこと鼻にかけて極楽参りするんじゃないと、佛教の哲理を悟るんじゃない。ただ私心なく謙虚になって裸にならなきやだめだということをいっておられるんです。その法然聖人の教えをうけられた親鸞聖人は、次にそこに言うておられますね。言うておられる相手は、その四行が右に書いてあるように「おのおの十余箇國の境を越えて、身命を顧みずして尋ね来らしめたまふ御志、ひとへに往生極楽の道を問ひ聞かんがためなり。」と。つまり西洞院のあの辺に住んでいらつしやる晩年の親鸞聖人のもとへ、関東から十四カ國の境をこえて、命がけで親鸞聖人を訪ねてくる信者がたくさんあったと。それは何のために来たかという、人生の悟りを開きたい、つまり往生極楽の道を問ひ聞かんがためなりと。その人々に対する答えとしておっしゃっておるのがそのカッコのとこなんです。「親鸞におきては、『たゞ念佛して弥陀にたすけられまゐらすべし』と、

よきひとの仰せを被りて信ずるほかに、別の仔細なきなり。」この「よきひとの仰せを被りて」のよきひととは、もちろん師匠の法然聖人でございます。「よきひとの仰せを被りて信ずるほかに、別の仔細なきなり。念佛はまことに浄土つよに生るゝ因にてやはんべる（一字ナシ）らん、また地獄に墮つる業にてやはんべるらん、惣してもって存知せざるなり。たとひ法然上人に賺つかされまゐらせて、念佛して地獄に墮ちたりとも、さらに後悔すべからず候。」と。つまり、我が師匠と申う法然聖人に騙されて自分が地獄に墮ちたのももう構わない、私は法然聖人の仰せのままにするんだという、虚心坦懐な弟子親鸞の気持ちをごに書いておられる。在世中に直接この言葉聞いた弟子唯円その他が、後年編んだのが歎異抄でございます。

じゃ、この辺で終わらせていただきます。どうも本当にご清聴、まあ先程も申しました『おうけ』下さいまして、心から感謝に堪えませせん。ありがとうございました。

（京都タワー株式会社取締役社長  
株式会社ホテル京阪京都取締役社長）